

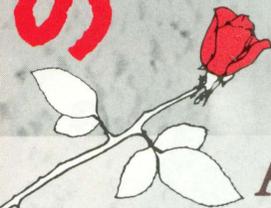
まだ、わたしの時間はある……。
きっと逢えるわ、希望をすてないで……

約束よ。

いまなおチエコの国民に愛され、語りつがれるレジスタンス女性の青春。

マルシカの

金曜日



A pozdravuji vlaštoky

監督・脚本 ヤロミール・イレッシュ / 撮影 ヤン・チュジーク / 音楽 ルボシュ・フィシエル
マグダ・バシャーリオバー / ピエラ・ストルニスコバー / ユーリウス・バシェック
ハナ・バステジコバ / ダグマール・ブラーホバー <カラー作品> チェコ映画

新日本映画社

A pozdravuji vlastovky

〈カラー作品〉チェコ映画



マルシカの 金曜日

新日本映画社 90

●大きな共感を呼ぶ実在のヒロイン

「私は愛する人々と母国のために命を捧げます、さようなら……」

かぎりない未来を持ちながら、この言葉を残して22才の短い生涯を閉じたマルシカ。ドイツ軍に侵略された母国のために戦って、いまなおチェコ国民に愛され賛えられる女性の勇気と誇りに満ちた青春を描く感動の実話映画です。

●マルシカの日記をドラマ化

第二次大戦の始まる直前にナチ、ドイツに対して、反ファシズムの運動に身を投じ、捕われて処刑されたマルシカが、獄中でひそかに綴った日記。これはいかにも若い女性らしい感性とこまやかな愛情にあふれたメモで、マルシカの獄中生活はもとより、平和だった母国の農村、家族や恋人のこと、そしてドイツ軍進駐とレジスタンス運動のエピソードが回想された胸迫る文章です。この真実の手記をドラマ化した作品だけに、すばらしいアリティが、感動をより深いものにしていきます。

●心に灼きつく映像美と詩情

かぎりなく美しい母国チェコの平和な農村生活。父と母、弟や妹との家族愛。やさしい恋人との日々。やがてそこに襲いかかるドイツ軍の侵略。そしてマルシカの情熱的な活動と獄中生活。これらの場面が交互に展開し、心に灼きつくような映像美のなかに、健気なヒロイン、マルシカの青春が浮き彫りにされます。

●死刑判決から99日目の金曜日

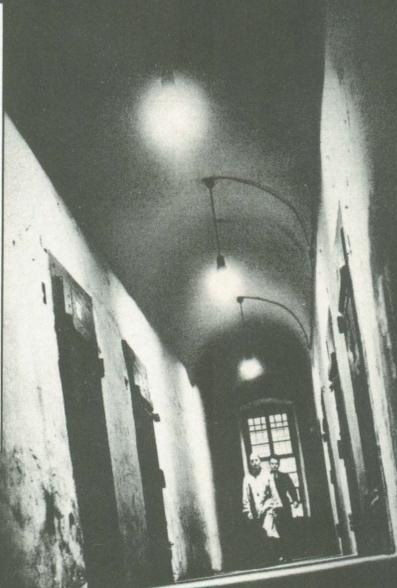
獄中の人々に対して、ドイツ軍は死刑の判決から99日後の金曜日に処刑というルールを実行。マルシカの仲間の女囚たちが次々と断首され、従って獄中では、金曜日が最も恐ろしい日となります。タイトルの「金曜日」の意味するところ

マルシカが処刑されたのは、入獄後124日目。金曜日。彼女の22才の誕生日2日後のこと。誇りと勇気にみちたマルシカが、毅然として処刑の場に向うラスト・シーンは涙なくして見つめられないほど感動的です。

●チェコ映画が世界に誇る名篇

日本においてチェコ映画はそれほどなじみはありませんが、そのユニークな映画づくりで近年とみに脚光を浴びています。これまでの日本公開作品を挙げると世界中を驚かせた名作「悪魔の発明」(59年)、「猫にさばかれる人たち」(64年)、「抵抗のフラハ」(74年)、「口笛はあの青い空に」(77年)、「真夏の夜の夢」(79年)等があります。大げさな娯楽作品こそありませんが、みな心をこめた着実な製作態度につらぬかれた作品ばかり。

この「マルシカの金曜日」はとくに全篇、美しいリアリズム映像詩とも言うべきチェコ映画独得のタッチで、見る者の心を大きな感動で満たします。



白い壁が、毎日私を見つめている
扉はいつも閉ざされている
それでも小さな窓から
小さな光が射してくる
それが私の希望
その小さな光のなかで
想い出が踊る
平和だった私の村
素朴な父と母
愛らしい弟と妹
そして優しい初恋のひと
いまこそ私は愛する人々の
頬にキスを贈る
この白い壁のなかから……
哀しみより歌。涙より歌
いのちある日まで
マルシカ

10月ロードショー 《音協10月例会作品》

*音協鑑賞券1000円(一般1400円 学生1200円)の処発売中!

伊勢丹斜め向い・新宿東映会館2F
新宿東映ホール (351) 3022

連日	12:00	1:50	3:40	5:30	7:20
----	-------	------	------	------	------